吉田ルイ子と黒人たち

三　浦　雅　弘

はじめに

2009年1月、ケニア人の父をもつアフリカ系アメリカ人のバラク・オバマ（1961-）が、米国の第44代大統領に就任したことは、同年最大のニューズであったといってよいだろう。しかしながら、遠からずオバマが退陣しようとしている2015年においても、米国内での黒人差別（segregation）に起因する事件は、到底跡を絶っていないどころか、むしろ顕著化している気配すらある。

本稿は、黒人差別撤廃を求める米国公民権運動が最高潮に達した頃に滞米していた写真家・吉田ルイ子（1938-）のメッセージを考えようとするものである。それは、‘Black is beautiful！’―この単純な、つまり、簡潔で飾り気がなく、純一な無条件のメッセージを真摯に受け取るために最低限必要なわれわれの認識はどのようなものなのか。

Ⅰ．吉田ルイ子滞在期の米国

吉田ルイ子がフルブライト奨学金を得て渡米したのは1961年のことだった。当初はオハイオ州立大学大学院に在籍したが、ほどなくコロンビア大学大学院に移籍する。そこで知り合った公民権運動活動家の白人大学院生と結婚し、翌1962年6月には、ニュー・ヨーク市マンハッタン島北部にある「ハーレム」と呼ばれる地区内の低所得者向け団地に入居している。1964年7月に夫婦はハーレムを去り、やがて二人は別居するが、最終的にフォト・ジャーナリズムを専攻した吉田がコロンビア大学から修士学位を得たのも、同じ1964年のことである。

吉田が大学院生だった3年の間には、黒人のジェームズ・H. メレディスのミシシッピ大学入学を巡って二人の死者が出た「メレディス事件」が1962年9月に発生し、激しい国内暴動を経た後の1964年7月に公民権法（Civil Right Act）が成立したのだった。その間の1963年11月に起こったジョン・F. ケネディ暗殺は、文字通り世界を震撼させる事件だった。公民権運動に大きなうねりを呼び起こしたのが、乗り合いバスの人種隔離法に対する異議申し立てであったことはよく知られている[1)]。1955年、当時42歳の裁縫工だったローザ・パークスがバスの座席を白人に譲らなかったことで逮捕された事件に始まった闘争は、その後も黒人および彼らを支援する白人らの夥しい血が流されながら継続され、人種平等会議（Congress of Racial Equality；CORE）が勝利を宣言したのは、吉田がハーレムに居住していた1962年12月になってのことだった。パークスとはのちに吉田も偶然顔を合わせている[2)]。

ハーレムに入居して4か月後の1962年10月には、吉田ルイ子はハーレムの人々の撮影を開始している。のちの回想では、黒人たちと触れ合うことで、自らイエローの女性としてのアイデンティティを発見しようとした[3)]とも語られているが、撮影を始めたときから少なくともしばらくの間は、差別を受け貧困に甘んじながらも、大らかで屈託のない黒人たちの生き方に魅せられて撮り続けていたことは疑いないだろう。

1964年7月に成立した公民権法の正式名称は、

「憲法上の投票権を実施し、公共施設における差別に対する差し止め救済を与えるため、合衆国地方裁判所に裁判権を付与し、公共機関、公教育における憲法上の権利を保護するため、訴訟を提起する権限を司法長官に授権し、公民権委員会を拡大し、連邦援助計画における差別を防止し、平等雇用機会委員会を設置する等の目的のための法律」というものであり、その条項中に、のちの係争点の一つともなった「差別是正措置（affirmative action）」という言葉が含まれていた[4)]。公民権法成立の歴史的意義の重大さはいうまでもなく、同じ年の12月にはM. L. キングJr.の永年の活動に対してノーベル平和賞が授与される。ところが、強い危機感に駆り立てられた白人優越主義者の反動的攻勢は、激越で往々にして残虐なものとなり、公民権法成立の直前にはミシシッピ州フィラデルフィア郊外で公民権運動家3名の虐殺死体が発見されるなどいくつもの事件が発生した。

あい継ぐ差別主義者の白人たちの襲撃に対して、黒人たちの間にいわば「黒人民族主義（black nationalism）」のようなものが燃え立ったことは不思議ではないだろう。15歳の黒人少年が白人警官に射殺された事件をきっかけに、吉田ルイ子の住むハーレムでも暴動が起こり、1964年7月18日から19日にかけて、白人と黒人との間に銃撃戦が発生する[5)]。吉田と夫のロバートとは、2年の間居住したハーレムを去り、ニュー・ヨークのグリニッジ・ヴィレッジに転居する。その際の夫婦の擦れ違いも起因となって、吉田は一時帰国を経て、翌1965年9月にはヴィレッジ・ヴァンガード裏のバンク・ストリートで独居を開始する。

ブラック・ムスリムの指導者として、白人の暴力に対しては暴力をもって対抗することも辞さないと宣言していたマルコムXが、組織内抗争も絡んでニュー・ヨークで暗殺されたのは1965年2月のことだった。吉田ルイ子には、マルコムXの葬儀に参列するブラック・ムスリムの人々を捉えた印象的なショットがあるが、その作品の撮影が契機となって、吉田は以前にも増して真剣にハーレムにコミットしていったと述べている[6)]。マルコムXから多大な影響を受けたストークリー・カーマイケルによって提唱された「ブラック・パワー」というスローガンに鼓舞されて、1966年10月には、カリフォルニア州オークランドにてヒューイ・P. ニュートンおよびボビー・シールにより「ブラック・パンサー党」が結成される[7)]。

再渡米してニュー・ヨークに暮らしていた吉田ルイ子は、1967年5月、止むに止まれぬ衝動に駆り立てられるようにして再びハーレムを訪れている[8)]。ハーレムは激変していた。美容院では「縮れ髪伸ばします」の張り紙が消えてアフロヘアの鬘がディスプレイされている。マネキンも青白い人形から黒人人形に姿を変えていた。ポスター販売の店では、白人のポスターはジョンとロバートのケネディ兄弟のものだけだった。吉田は、ブラック・パンサーの活動も見学する[9)]。キングやブラック・ムスリム主導のグループは、自ら暴力に訴えることはしないが、ブラック・パンサーは空手や柔道、さらには銃器の使用法まで積極的に指導していた。彼らからすれば、日本はあくまで米国帝国主義の片棒をかついでいる敵国でしかなかった[10)]。

1967年8月、吉田ルイ子はニュー・ヨークの広告会社に専属カメラマンとして雇用され、それから4年間を広告カメラマンとして過ごすことになる[11)]。当時広告会社では、社会的テーマをもつ公共広告のためなどに、ドキュメンタリー・フォトの撮れるカメラマンが求められるようになっていた。吉田の俊敏に被写体の心を掴む能力が評価されたという。同じ年の12月には、その後1967年度の米国公共広告賞を受賞することになる作品を撮影している。「貧困のポケットの中に何が入っている？」と題されたその作品は、ハーレムの路地にあるトラッシュ罐の陰から、じっと吉田ルイ子と彼女の助手を見つめている少年を撮ったものだった。その少年の瞳がひときわ印象的な作品である。

その後吉田ルイ子が1971年1月に帰国するまでも、1969年7月のアポロ11号による月面着陸などのニューズもあったものの、ベトナム戦争は泥沼化の様相を呈し、また、1968年4月にはキングが、同じく6月にはロバート・ケネディが暗殺されるなど、米国の歴史は暗いページを刻み続けていた。

Ⅱ．吉田ルイ子の黒人写真

帰国後の吉田は、1972年に「ハーレム　Black is Beautiful」という個展を開催し好評を博する。10年間の滞米生活で撮りためた写真は3万点に及ぶというが、特に黒人たちを撮り続けた理由として、吉田は二つのことを挙げている[12)]。一つは、偶然置かれた環境で彼女にとって目を見張るほど美しいイメージを発見したこと、そしてもう一つは、すでに触れたように、圧迫と葛藤の歴史の中で、アイデンティティに目覚めて行く黒人の姿のうちに、同じ米国に生き始めた吉田自身の「イエロー」のアイデンティティを模索しようとしたことであった。より具体的には、ホット・ニューズは報道カメラマンに任せて、彼女自身はそれらのルーツにある人々の心や日常というものを撮りたかったという[13)]。それをさらに普遍化させて、たまたま吉田が置かれた米国という環境から発生した人種問題を、人種問題としてのみならず人間の問題として追求したかったのだとも述べている[14)]。

吉田によれば、フォト・ジャーナリストには、対象に深くコミットして撮るマイクロの視点と、対象から距離を置いて客観的に見ようとするマクロの視点が求められる[15)]。ハーレムでの中心機材はマイクロ（接写）レンズだった[16)]。50センチメートルの至近距離で顔にレンズを向けると、35ミリのフレームいっぱいに顔が写る。撮る者と撮られる者の心音や呼吸音が一致した瞬間にシャッターを切るのが、吉田ルイ子の撮影法だった。そうして撮影した作品について、吉田は必ず自分でキャプションを書いてきた[17)]。撮影した人間の証言なしには、その写真の記録性は存在しない、と彼女は述べている。

おそらく吉田ルイ子は、1914年生まれの笹本恒子、1930年生まれの常盤とよ子に次いで、日本の女性写真家として世に知られるようになった存在である。吉田によれば、女性であることは、日本人であること、小柄であること、子供っぽく見られること、等々と同様に「吉田ルイ子」という人間の属性の一つに過ぎない。フォト・ジャーナリズムという仕事においては、究極的には女性の生理的部分ではなく自分自身の視点こそが問われる、という[18)]。

作家の大庭みな子は、吉田の写真作品には、魅力的な人格や個性をもった黒人の人生が、白人ではない別の人種である吉田ルイ子の対等な感覚において、称賛の目で捉えられている、と語っている[19)]。吉田ルイ子の作品群に言葉を添えた詩人の木島始は、撮影当時の吉田について、憧憬に貫かれて胸をわくわくさせながら、まだ夢を打ち砕かれたことのない無邪気な子供の視線でシャッターを切っている、と想像しながら、しかしそのような時期はそうたびたび訪れるものではない、と述べている[20)]。吉田ルイ子の作品において数多く被写体とされている思春期以前の子供というものは、撮影に比較的困難は少ないかもしれない。隠し撮りはしない[21)] 吉田が、レンズを向ける成人の被写体から拒まれないどころか進んで笑顔を返されることも多い理由のひとつには、やはり小柄な日本人女性であるという属性が関わっているだろう。

ハーレムの巨大なアパートメントの前に屯している人々や、窓から体を乗り出している人々を撮影しているいくつかの作品は、人物写真とは言えないかもしれないが、興味深い情景写真である[22)]。木島始も指摘するように、ハーレムはもともと上流階級の住宅地であり、そこに第一次世界大戦以後黒人たちが移住したという歴史があるため、特にハーレム暴動以前の巨大アパートメント群とそこに住む黒人たちは、吉田ルイ子の視線に対して穏やかな佇まいを見せている。

『LUV―時さえ忘れて』の第1章は、「ニューヨーク、ハーレム、ジャズの日々」と題されて、ジャズ・ミュージシャンたちの姿が十数葉にわたって収められている。ウェイン・ショーターのプライヴェートなワン・ショット以外はサイズが小さめなのが残念だが、ジョン・コルトレーンの正面像や、演奏中のハービー・ハンコックを俯瞰して撮影したショットをはじめ魅力的なポートレイト作品群である。

米国のジャズ・ミュージシャンを撮り続けた邦人写真家には、中平穂積（1936-）、内藤忠行（1941-）らがあるが、その中でもひときわ目を引くのは阿部克自（1929-2008）の残した作品群であろう[23]。写真家に転身する以前は自らプロフェッショナルのジャズ・ギタリストであった阿部の作品群には、おそらく100名にも及ぶであろう名だたるジャズ音楽家たちが収められている。彼らのうちのかなりの人々と友人づき合いをしえて初めて撮れたであろうと思われるものも少なくない。

吉田ルイ子の撮影したコルトレーンらは、ステージ上で楽器を前にして柔和な表情をたたえている。特にカメラを構えた吉田と目が合っている作品がそうであるのは、阿部克自とはまた違った関係性が、ミュージシャンと吉田との間に成立しているからではないだろうか。

Ⅲ．黒人差別を解消するために

(1)「黒人教会」という存在

マヘリア・ジャクソン、アレサ・フランクリン、ロバータ・フラックといったゴスペル・シンガーたちが、いわゆる「黒人教会」から出立したことはよく知られている。1865年の南北戦争終結後、奴隷制こそ廃止されたものの、米国南部における白人による黒人支配の構造を改変する試みは遅々として進まずにいた。その中で教会は、黒人が最も頼ることのできる公共の場であり、ことに南部では黒人の日々の生活自体が教会を中心に回っていた[24]。黒人たちに集会と表現の自由が保障されていた事実上唯一の空間として、教会の存在意義は比類のないものであった。

だが、米国の建国時まで遡るならば、支配者としての白人が教会内部においてのみ黒人奴隷の集会を許したのは、支配の道具としてのキリスト教という西洋宗教で彼らを洗脳しようとしたからにほかならなかった。イングランド法が実効を有していた1776年の米国独立宣言以前および以後も暫時の間、白人支配者はキリスト教の洗礼を受けた奴隷のみを「自由黒人」にしていたのである[25]。

黒人の受洗は白人への服従の儀式であり、その洗礼の場としての教会が、黒人によって逆手に取られるかのように抵抗の拠点とされるとは、白人支配者たちは思いもしなかったに違いない。南部教会から生まれた黒人福音歌としてのゴスペル・ソングも、黒人が米国で独自に作り上げた文化の一例であろう。しかしそれが本質的にキリスト教教会に根差すものであるか否かは即断を許さないかもしれない。というのは、ジャズ・ピアニストのハービー・ハンコックが、「ニグロ・スピリチュアルやゴスペル・ソングは、キリスト教から生まれたものではない。もしアフリカから奴隷として連れて来られた場所が仏教国だったら、われわれ黒人は仏教の寺でそれらを始めていただろう」と、注目すべき発言をしているからである[26]。

2015年6月にサウスカロライナ州の黒人教会において、白人男性が銃を乱射して9人の黒人を死亡させるという事件があった。「黒人教会」という名称自体正式なものではなく、先行した北部のように深南部各州にも白人黒人両者が集う教会は時とともに少しずつ増えているだろう。それには公民権運動と並んで、差別された黒人奴隷の苦しみを歌った福音歌が米国の白人支配層に受け入れられたことも少なからず与っているだろう。それはある意味で皮肉なことであるが、存続する「黒人教会」で近年なお痛ましい差別事件が引き起こされていることを思い合わせるならば、人種の壁を越えた教会の増加が求められるべきなのか

もしれない。しかしその一方で、黒人の人種的アイデンティティを証しし、その文化を存続させる場としても機能している「黒人教会」の存立意義を述べる吉田ルイ子の意見にも耳を傾ける必要があろう[27]。

(2) 人種統合政策

人種差別の是正には、住環境と教育環境における隔離を撤廃して行くことが強く求められる。公民権法成立後の人種の統合（integration）政策はまさにそれを目指して、住宅や学校での人種の共存を推し進めるものだった。その政策の成果は、黒人の乳児死亡率、大学進学率、年次所得等の指標の変化に反映されるが、ロナルド・レーガンの大統領在職期（1981-89年）には数値上の改善が後退している[28]。その当時の米国情勢を見つめた吉田ルイ子の目には、統合政策そのものがむしろ失敗していると映ったようだ。

吉田によれば、英国の王室や日本の皇室に当たるもののない米国では、欧州各地から押し寄せた白人たちの社会も本来的に無階級社会である。米国社会で権力を得てそれを維持する手段として白人たちが必要と見なした基盤は、プロテスタンティズム、学歴、そしてそれらに立脚する経済力だった[29]。つまり、白人の権力構造の基盤に位置するのは、別して男性優位の近代資本主義にほかならない。吉田ルイ子の取材を受けたジャズ・ドラマーのマックス・ローチによるならば、人種統合を謳うさまざまな局面で、黒人は白人の商業主義に利用されたに過ぎず、そのわかりやすい一例が音楽業界だという[30]。白人と黒人が手を握った「人種統合」の勝利とも映る音楽ビジネスも、旧態依然とした白人と黒人それぞれによる「頭脳」と「肉体」の分業による成功であることが少なくなかったかもしれない。人種差別に根を下ろした米国資本主義の経済構造には、奴隷制以来の「あたま」と「からだ」の分業が組み入れられているというわけである[31]。加えて吉田によれば、米国は経済的にも軍事的にも世界最強で、最も自由な国であるという白人米国人一般の抱く大国主義妄想が、今日における世界の諸悪の根源なのである[32]。

(3)「白」と「黒」―科学的視点の余地

社会的なクラスとしての階級がない米国に、それに代わって根深く巣食っているのは、ハイアラーキーとしての人種階層である。吉田ルイ子によれば、その人種的ピラミッドは、頂点のアングロサクソン系から、それに続いて、フランス系、ドイツ系、アイルランド系、イタリア系、東欧系、ユダヤ系、東洋系、南米プエルトリコ系と下って行き、最底辺に黒人が位置させられているという[33]。日本が単一種族（monophyletic）であるか否かは措くとしても、日本人に米国社会のハイアラーキーが分かりにくいのは吉田のいうとおりであろう。黒人自身が色の黒い自分を白人より劣ると信じている事実に直面したとき、吉田は心から衝撃を受けたという[34]。

今なお、根絶にはほど遠い人種差別を解消して行くためには、吉田の指摘するとおり差別構造を内部に組み込んだ米国経済体制の変革が強く求められよう[35]。経済を主導する官僚機構においても、そのコントロールの下に利潤を追求する民間企業においても、白人が主となり、黒人が従となる慣行が永年続いて今日に至っている。1964年の公民権法に盛られた差別是正措置の展開に当たっては、白人側からのいわゆる「逆差別」訴訟もその後あい継いだわけであるが、目指すべき経済体制変革のためには、政府の強大な指導力が必要とされるのかもしれない。

差別構造を内在化させた経済体制の変革はもとより緊要であるが、ある意味でそれにもまして求められねばならないのは、吉田ルイ子の言い方を借りるならば「生活の質」の変革である[36]。具体的には白と黒にまつわる隠喩的イメージの払拭ということになるのだろうか。白には、正、善、無罪、勝利、生…といった肯定的なイメージがあい伴い、黒には、邪、悪、有罪、敗北、死…といっ

た否定的なイメージがつきまとう。しろうとに対してくろうとが、また、武道などでは白帯に対して黒帯が重きを置かれる日本の慣用は、世界でも例外的なものかもしれない。だが、吉田によれば一般的な黒白イメージの対比は、黒人たちにも染みついているのだという。この点において、‘Black is beautiful！’というスローガンの革新性、重大性はいかに強調しても強調し過ぎることはない。

長らく人に染みついた固定観念やイメージを消去することはもちろん容易ではない。だがその一方で、天動説や神による万物の創造を信ずる者が今や些少であることも事実である。いかに緩徐な歩みであれ、われわれが科学的知識の力を借りて前進してきたことを疑うことはできない。今日の生物学者は、人種というものをどのように捉えているのだろう。

自然界に実在する単位としての種（species）概念に、現行の定義を与えたのは20世紀のエルンスト・マイアである。それによれば、種とは共通の遺伝子プールを有する、現に交配している、あるいは、潜在的に交配しうる生物集団である[37]。種の上位概念に当たる属や科や目には、ある意味において恣意性が伴うという。

われわれ現生人類の種名は「ホモ・サピエンス」であり、いわゆる「人種（race）」は、生物学的分類の最下端といえるかもしれない亜種（subspecies）ということになる。そこにおいて、黄色人種（Mongoloid）、黒色人種（Negroid）、白色人種（Caucasoid）などの区分が行われてきたわけである。しかし、「種」の定義からも窺われるように、亜種はメンバーがその中の他のいかなる亜種とも交配可能であるので、亜種の境界は固定した明確なものではありえない[38]。グールドによるならば、亜種とは、一つの種内に地理的に区切られた不連続な集団を設けることで、変異性（variation）についての理解が増すと判断されるときにのみ使われる便宜的なカテゴリーなのである[39]。そして今日の生物学においては、種内の地理的変異についての定量的研究の進展の結果、種を亜種に下位分類する習慣そのものが捨てられているという[40]。

たとえ学術的慣行の変更ないし棄却が速やかに進行しようとも、それが一般の人々に広まり根づくまでに経過する時間は予測不可能である。しかし、亜種という分類の無効性、したがって人種区分というものに意味がないことを認識し、‘Black is beautiful！’という標語が革命的なものでなく、自明なものと感じられるまでに、白と黒にまつわる旧来の隠喩的イメージを払拭することは、決して見果てぬ夢ではないと思われる。

おわりに

本稿では、滞米中の吉田ルイ子が黒人たちを被写体に撮影した作品群を見つめながら、彼女の言葉を追うことを通して、今日なお到底絶えたとはいえない差別を解消して行く手だてを考えようとした。吉田のいう黒と白の隠喩的イメージにまつわる「生活の質」の変革と、差別構造を内在化させた経済体制の変革は、いかなる困難が伴おうと必ず成就されねばならない。加えて、人種という概念の無効性を知ることが小さからぬ一助となるのではないだろうか。

吉田ルイ子の作品群が示しているのは、美の基準を白に一元化することの不可能性なのである。

註

1） 本田創造、『アメリカ黒人の歴史』、岩波新書、1991年、岩波新書、175頁以下。
2） 吉田ルイ子、『吉田ルイ子のアメリカ』、講談社文庫、1986年、261頁。
3） 同上、95頁以下。
4） 本田、前掲書、216頁以下。
5） 吉田ルイ子、『ハーレムの熱い日々』、講談社文庫、1979年、97頁以下。
6） 吉田ルイ子、『LUV―時さえ忘れて』、冬樹社、1983年、10頁。

7）　本田、前掲書、227頁以下。
8）　吉田、『ハーレムの熱い日々』、119頁以下。
9）　同上、131頁。
10）同上、196頁。
11）同上、182頁。
12）同上、216頁。
13）同上、66頁。
14）吉田、『吉田ルイ子のアメリカ』、199頁。
15）吉田ルイ子、『フォト・ジャーナリストとは？』、岩波ブックレット、1987年、21頁。
16）同上、18頁以下。
17）同上、53頁。
18）同上、59頁。
19）吉田、『吉田ルイ子のアメリカ』、197頁。
20）吉田ルイ子・木島始、『ハーレム―黒い天使たち』、サンクチュアリ出版、2010年、102頁。
21）吉田、『ハーレムの熱い日々』、198頁には、暴動後のハーレムの酒場でただ一度隠し撮りをして恐ろしい思いをした作品が載せられている。
22）吉田・木島、前掲書、3頁。吉田、『LUV―時さえ忘れて』、9頁。
23）高木信哉・中平穂積・内藤忠行、『東京Jazz』、三一書房、2001年。阿部克自、『50 JAZZ GREATS FROM HEAVEN』、シンコー・ミュージック、1995年。
24）バーダマン、ジェームズ・M.（水谷八也訳）、『黒人差別とアメリカ公民権運動』、集英社新書、2007年、74頁。
25）吉田、『LUV―時さえ忘れて』、60頁。
26）同上。
27）同上、62頁。
28）本田、前掲書、236頁以下。
29）吉田、『吉田ルイ子のアメリカ』、286頁。
30）同上、180頁。当時マックス・ローチは、マサチューセッツ大学で音楽教育の教授職にあった。
31）吉田、『ハーレムの熱い日々』、179頁。
32）吉田、『吉田ルイ子のアメリカ』、298頁。
33）吉田、『ハーレムの熱い日々』、210頁。
34）同上、75頁。
35）同上、150頁。
36）同上、151頁。
37）グールド、スティーヴン・J.（浦本昌紀・寺田鴻訳）『ダーウィン以来―進化論への招待』、ハヤカワ文庫、1995年、349頁。
38）同上、350頁。例えば、日本で一般に「キツネ」と呼ばれる哺乳類の日本語種名は「アカギツネ」であり、その亜種として、本州に生息するホンドギツネや北海道に生息するキタキツネがある。
39）同上、351頁。
40）同上、347頁。